コンスタンス・ブラウン・クリヤマ著のマーロウ伝 *Christopher Marlowe: A Renaissance Life* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2002) を概観する

坂本　つや子

要旨：Constance Brown Kuriyama による Christopher Marlowe の伝記研究は、John Bakeless に始まる、ヴィクトリア期以降マーロウ研究が盛んになって以来、次々に発見される資料をもとにした実証的研究の流れに沿っている。しかしクリヤマは膨大ではあっても、断片的な資料に基づいて過去の人物像を再構築する際に陥りがちな、先入観による事実歪曲の危険性についても認識している。クリヤマはカンタベリにおけるマーロウの一族とキングズ・スクールの教師、ケンブリッジ時代以降の友人や周辺の人々、ケンブリッジの頃から繋がりがあったと考えられる国務長官サー・フランシス・ウォルシンガムおよびバーリー卿父子、ロンドンの劇場関係者たち、およびパトロンであったトマス・ウォルシンガムやストレンジ卿、あるいはサー・ウォルター・ローリーおよびノーサンバランド伯爵等、マーロウの人生にかかわった人々との関係性について綿密に分析を行い、マーロウの人生の謎の部分について、極めて理性的な考証を行っている。

はじめに

英国においてマーロウ研究が盛んに行われるようになったのはヴィクトリア期以降であるが、初期に書かれた伝記は時代思潮を反映して、「無神論者」あるいは「同性愛者」と目されるマーロウの生涯と非業の死について、道徳的立場から批評する傾向のものが目立っていた。しかし John Bakeless に始まる近年の実証的研究においては、カンタベリ時代、ケンブリッジ時代、およびロンドン時代におけるマーロウの人間関係、教育環境、経済状況等について、新たに発見されつつある資料に基づく研究がなされており、また彼が生きたエリザベス時代の社会状況、宗教並びに政治における国内および外国勢力の相関図等についても、同様に綿密な考証がなされるようになった。

Kuriyama はこれまでのマーロウ研究者、Leslie Hotson, Frederick S. Boas, Mark Eccles, C. F. Tucker Brooke, John Bakeless 等による伝記研究、とりわけ膨大な資料をもとにマーロウの生涯に迫ろうとしたベックレスの研究に敬意を表し、彼らの業績がクリヤマ自身の研究の礎となったことに感謝しつつも、その問題点を指摘している。たとえばクリヤマはマーロウの足跡を記録した法的書類の解読方法について、膨大ではあっても断片的な資料をもとに一人の人物像を作り上げることは、誤りをおかす危険が大きいと考えている。この例としてクリヤマは、マーロウがホーリーウェル・ストリートで些細な騒動を起こして捕縛された事件、および、非業の死の原因となったデットフォードでの喧嘩沙汰等についての研究者たちの平均的意見を挙げ、彼らが法的書類を分析し、それをもとにマーロウの人物像を構築する際に、マーロウの私生活についての従来の定説に基づく先入観にとらわれるあまり、肯定的な見方よりむしろ否定的な見方をする傾向にあるが、これは間違いであると警告している。クリヤマは彼らの見解に対する反証として、マーロウの 29 年の人生のうち、最初の 25 年間は特にこれといった事件も

なく、平穏に過ぎていることに注意を促している。クリヤマは *Christopher Marlowe: A Renaissance Life* において、巻末に貴重な資料を多数収録しているが、このような資料を扱う際のクリヤマの姿勢は一貫しており、極力センセーショナルな見方を避け、冷静で理性的な判断を心がけている。これはマーロウのように悪評と錯綜する人間関係のなかで生涯を終えた人物について語る場合には、とりわけ大切なことであろう。

宗教都市カンタベリ

マーロウ出生の地であるカンタベリについて、クリヤマはまずマーロウの家庭環境について考察している。マーロウに敬意を表することに熱心な、ポスト・ヴィクトリアンというべき20世紀初頭の研究者たちは―注意深いボアズ、ブルック、ベックレス等の研究者さえ―父親のJohn Marloweが、カンタベリの裕福な皮革鞣業者、Christopher Marley（-1540）の死後に生まれた息子であると信じたがっていた。しかしジョン・マーロウ自身、自分がカンタベリの10マイル西にあるフェヴァシャムの近くにあるオスプリンジという村の生まれであることを記録に残しており、また後にカンタベリ出身の研究者William Urryがこれを裏付ける証拠を発見している。

宗教都市としてのカンタベリがマーロウの人格形成に強い影響を与えたことは研究者たちの一致した意見である。この地はもともと英国キリスト教の揺籃の地であり、中心地であったが、のちにカンタベリ大司教トマス・ア・ベケット（在位1162-70）が、教会法の王権からの独立を主張して国王ヘンリー2世と対立し、大聖堂内で殺害されたことで、今一つの意味を持つ場所となる。クリヤマはこの都市が長年にわたり、トマス・ア・ベケット崇拝のメッカであったことに注意を促している。エリザベス1世の父であるヘンリー8世は、ローマ教会から離脱し、修道院解散を行った。彼がベケット崇拝を阻止するため、遺骨を焼却し、遺灰をバラ撒いたことはよく知られた事実である。崇拝はヘンリーの長女であるカトリック女王メアリの時代に復活した。メアリ女王時代には41名のプロテスタントがカンタベリで審判、処刑されたが、これはマーロウが誕生する少し前のことである。またカンタベリには、ヘンリー8世の離婚問題に関連して処刑されたトマス・モアの、長女マーガレットの夫であるウィリアム・ローパーの家代々の墓所があり、そこには20世紀になって列聖され、「聖者」となったトマス・モアの首も祀られている。何れも王権より、教皇がその代表者たるローマカトリック教会の権威が優越すると考え、これに殉じた人々である。クリヤマは特にベケットの場合、彼が自らの生命を犠牲にしてまでも、王権を超える権力を手に入れようと欲したのではないかと憶測している。

マーロウが9歳の時、エリザベス女王の2週間にわたる行幸があった。クリヤマをはじめ多くのマーロウ研究者たちは、女王がカンタベリを通過した時には、未来の劇作家が、絹や宝石に飾られた宮廷人たちの煌びやかな行列を目のあたりにして、カンタベリの日常とかけ離れた、富と栄光に満ちた世界が存在することを知った可能性は十分あると推測し、この経験がマーロウの創作活動その他に一定の影響を与えたのではないかと考えている。

1580年、マーロウは、1544から1553までケンブリッジのコーパス・クリスティ学寮長を務めた、カンタベリ大主教マシュー・パーカー（1504-75）の創設したスカラシップを獲得した。これはカンタベリのキングズ・スクールから、ケンブリッジ大学に進学したいと希望する学生のためのものであった。奨学生になる資格には、ラテン語文法を完全に修得していることに加えて、聖歌（プレーンソング）（古くから教会で用いられている無伴奏の単声典礼聖歌、特にグレゴリオ聖歌を

いう）の譜面を見ただけで歌うことのできる技能、さらに出来れば韻文を作る技能が条件とされた。16 世紀後期には聖職者の質の向上を図る必要があったので、貧しい家庭出身の才能ある子弟に教育の機会を与えたのである。奨学金は原則 3 年給付であったが、教会に入る意思を示した場合は 6 年間給付された。

大学都市ケンブリッジ

マーロウは 1581 年 3 月 17 日、ケンブリッジ大学に入学し、5 月 7 日、正式に奨学生に選ばれている。彼がケンブリッジ入りしたのはまもなく 17 才になる頃であったが、これは―貴族階級出身の学生は別にして―当時の彼と同じ経済的、社会的背景を持つ学生の平均入学年である 21 歳より若かった。

1580 年、キングズ・スクールを卒業したマーロウは、奨学金の支給を待たずに、11 月末または 12 月初め頃ケンブリッジに向け出発したと思われる。ケント州カンタベリからロンドン経由で 100 マイルを旅してケンブリッジへ向かう旅は、冬場には特に過酷であった。当時ケンブリッジの人口は約 5,000 人、そのうち 1,900 人は大学関係者であった。コーパス・クリスティ・カレッジの buttery book（英国の大学内にある食料品等の売店の出納簿）には、12 月初旬に初めて 'Marlen' と綴られたマーロウの名前が現れている。クリヤマの考証では、早めのケンブリッジ入りは実際的な動機に基づくものであった。当時 BA 取得に 3 年、MA 取得にはさらに 4 年が必要であった。また 16 世紀には BA 取得は、より権威ある学位である MA を取得するための準備段階であると見なされていた。すでに述べたように、パーカー・スカラシップは、最長で 6 年間貰うことが出来た。従って奨学金の支給期間中に MA 学位を得るには 1 日でも早く学業をはじめ、最短年で学位請願資格を満たす必要があったのである。

ケンブリッジ時代のマーロウについて常に問題とされるのは、彼が MA 学位を請願した時、必要条件となる 'attendance requirements/ residential requirements[(1)]'（在学中長期間ケンブリッジを離れることを禁じた規則）を満たしていなかったため、最終的に枢密院の介入によってようやく学位が取得できたという点である。クリヤマはこの 'attendance requirements' の期間不足について、マーロウの記録だけを取り上げて論ずることをせず、同時期ケンブリッジに所属していた多くの学生の記録と比較することにより、BA を取得するまでのマーロウは、むしろ平均的な学生と比べると、年間を通してケンブリッジに居住している期間が長かったことを証明している。'residential requirements' の規定では、BA の 'Supplicat'（正式の学位請願書）を提出する資格を得るためには、4 年間ケンブリッジに居住することが条件となっているが、そもそもこの「4 年間」の意味するところは、3 学期×4 年＝12 学期間のことである。これは授業のある 3 学期に 'vacation term/ summer term' を加えた 4 学期×3 年＝12 学期でも同じ扱いとなる。多くの学生が卒業まで 3 年以上かかったのは、夏季休暇期間（ヴァケーション・ターム）はケンブリッジを離れるのが常であったためである。学則の建前と実際的な運用のギャップの理由はケンブリッジの衛生環境にあったらしい。沼沢地に囲まれていた当時のケンブリッジでは夏期に伝染病が発生することがあり、このため大学当局も、大勢の学生が居残っていた場合の危険性を勘案して、規則違反を大目に見ていたと考えられる。1581 年 3 月 17 日に正式に入学したマーロウについていえば、1584 年の 2 月半ばに BA 請願に必要な 'requirements' を完了しているので、3 年で取得要件を満たしたと考えられる。また 3 年で学部を卒業したので、MA 取得のための奨学金は十分であった。

BA 取得後のマーロウは、一転してこの規則を守らぬ傾向を見せている。彼の名は 1585 年 6 月中旬頃から 9 月中旬頃にかけ、約 2 カ月に渡ってコーパス・クリスティ学寮のバッテリーブックから消えている。先に述べた枢密院介入の理由として、彼が長期間ケンブリッジを留守にしたことは、諜報活動のため大陸に渡っていた証拠であるとする批評家が多かった。しかし近年になって、カンタベリ出身で大聖堂の古文書館に勤務していた研究者 William Urry[(2)]が、マーロウとカンタベリ出身の裕福な羊毛および毛織物商の息子 John Benchkin（1567 生、1585.6.30 にカレッジに登録）との交友関係を突き止めたことから、諜報活動説を覆す証拠が出てきた。ユーリーはジョンの義母と考えられる Mrs. Benchkin が、ジョンを相続人に指定するため作成した、1585 年 8 月 19 日付遺言証書を発見した。この遺言書には証人欄にマーロウ、マーロウの父と娘婿、および父の徒弟の署名があった。これによってマーロウ一家が証人として署名するため Benchkin の家に集まった時、マーロウは夏季休暇期間を利用してカンタベリに帰省中であり、恐らく学士号を持つ彼が署名する重みを考えた友人の要請で、証人に加わったことが明らかになった。

カレッジのバッテリーブックの記録等から判断して、マーロウと Benchkin とはカンタベリにいた頃からの知り合いで、1585-86 年のあいだ、出来るだけ一緒に行動しようとしていたと考えられる。クリヤマによれば 16 世紀は地縁（ローカル・タイ）が強力な時代で、新入学のマーロウのチューターとなった若い MA、Thomas Harris についても、彼がケント州出身であったので、人選はこれに基づいていると推測している。またクリヤマは、Benchkin は 1594 年 5 月 29 日（金曜日）に Katherine Grawnte との結婚許可証を申請しているが、これはマーロウの死（1593 年 5 月 30 日）から正確に 1 年後であり、Benchkin のマーロウに対する友情と敬意が感じられると記している。

ロンドン時代

クリヤマはマーロウは最初から聖職者になるつもりはなく、卒業を目前に控えた 1587 年の春または初夏には、ロンドンでの生活を考えていたと推測している。マーロウはケンブリッジを出てほどなく、ロンドン旧市街の北の市門であるビショップズゲイトの北方に広がるショアディッチに隣接する、ノートンフォルゲイトに居住したと考えられる。中世においては職住接近が普通である。1580 年代には劇場街はビショップズゲイトの北側にあった。現在のモダングローブ座があるバンクサイド界隈に劇場が建ち始めるのはもう少し先のことであり、1587 年にはローズ座もまだ設計の段階であった。この界隈は伝統的に市の統制外にある地域であった。ここは劇作家としてのスタートに好都合であるだけでなく、情報の売買を生業とする者にとっても都合のよい場所であった。マーロウはバンクサイドのローズ座が完成し、そこで彼の戯曲が頻繁に上演されるようになった後もノートンフォルゲイトに住み続け、そこからロンドン市内を通過してバンクサイドへ通っていた。

ビショップズゲイトのすぐ北には、『タンバレン大王』（*Tamburlaine the Great*）その他、マーロウの芝居の主役を演じることになるエドワード・アレンが洗礼を受けた教会もある。クリヤマはこの界隈について、演劇その他の娯楽（熊いじめなど）が行われたこの地域では売春が横行し、男娼窟もあったこと、演劇人や劇場に引き付けられる人々はアナーキーな傾向が強く、また常習的なトラブルメーカーたちもこの界隈に集まってきたことを指摘している。

法規制が緩い土地柄を反映して、ここはカトリック教徒たちが工作を行うのに都合がよかっ

たと考えられる。マーロウと同じくケント出身の聖職者 William Weston 神父は、一時期神学校のあったドゥエ、およびローマ、スペインを訪れた後、帰国してノートンフォルゲイトに近いホッグレインに居住していた。1586 年 8 月に彼を逮捕した二人の政府側工作員は、バビントン陰謀事件（エリザベス女王を殺害し、幽閉中のスコットランド（前）女王メアリを即位させようとするカトリック教徒の陰謀）の立役者である Anthony Babington と、イエズス会士 John Ballard 神父を見張っていた者たちである。またバビントン陰謀事件を探っていた Robert Poley（マーロウと最後に会食した 3 名のうちの 1 人）もこの近辺に居住していた。のちにマーロウのパトロンとなるトマス・ウォルシンガムは、ポーリーの家で従兄弟にあたるサー・フランシス・ウォルシンガムからの指令を受けていたと考えられる。また 1593 年にはエセックス伯爵のもとで情報収集を担当していたアンソニー・ベイコンも、1594 年に一時この地域に住んでいた。

ここでマーロウのロンドン生活の中で最初の不祥事というべき、ホッグレインでの乱闘について考える。マーロウは宿屋の亭主の息子である William Bradley にホッグレインで斬りかかられるが、続いてやってきたマーロウの隣人で詩人の Thomas Watson が両者を引き分けようとして介入し、ブラッドリーと斬りあう。ブラッドリーはおそらく最初からワトソンが目的であったが、目指す相手がいなかったので、先に来ていたマーロウに斬りかかったと考えられる。クリヤマによれば、この事件はもともと、ブラッドリーがエドワード・アレンの兄弟で劇場座の支配人であった John Alleyn から借りた金を返さず、ジョン・アレンが法廷に訴えたという経緯に端を発していた。ワトソンはアレンの弁護士の義兄弟であった。この決闘ではワトソンが、正当防衛と認められたとはいえ、相手方のブラッドリーを殺害する結果となり、マーロウともども短期間ではあったが、ニューゲイト監獄に収監されている。マーロウはニューゲイト監獄で John Poole という贋金作りの名人と知り合っている。この人物はカトリック教徒であった。クリヤマによるとカトリックと贋金作りの組み合わせは偶然ではない。彼らはエリザベス女王を廃位して、スコットランドのメアリのようなカトリック君主を誕生させるための工作活動に従事しており、活動資金調達のため、手っ取り早い手段を取っていたのである。この人物はまた海軍大臣 Lord Strange の姻族であるが、ストレンジ卿は隠れカトリックと目されたこともある。また「海軍大臣一座」はマーロウの芝居を上演したことで知られている。

ここで登場するワトソンは 1556 年ロンドン生まれ。ウインチェスター・カレッジとオックスフォードで学ぶが、学位を取得せず、ローマ法研究のため大陸に渡る。ドゥエの神学校で数ヶ月過ごし、パリにも行ったようである。一旦帰国した後、1580 年に再びパリに行き、このときサー・フランシスおよびトマス・ウォルシンガムと知り合ったらしい。インテリジェンス・レポートは彼のことを、パリに滞在中のありふれた教皇派英国人の一人であると記述している。マーロウはワトソンがギリシア語の原作をラテン語に翻訳した『ヘレネーの略奪』(*Helenae Raptus*) その他の作品を英語に翻訳したとされるが、残念ながら現存していない。

クリヤマはワトソンについて、彼が広い交友関係を持つ人物であり、ホッグレイン事件をもとに調べれば、ロンドンにおけるマーロウの錯綜した人的ネットワークが解明できると指摘している。ワトソン、Nicholas Faunt、トマス・ウォルシンガムおよびマーロウはすべてフランシス・ウォルシンガムと関係があり、お互いによく知った間柄であった。フォーントは彼の主人であるフランシス・ウォルシンガム同様、ピューリタンであった。彼は 1554 年前後にカンタベリで生まれ、マーロウの師でもあったキングズ・スクールの Mr. Gresshop のもとで学び、

1572年にケンブリッジのカイアス・カレッジに入った。彼はパリ滞在中、聖バルテルミーの虐殺に遭遇しており、これをマーロウに語ったと考えられる。ワトソンはカトリック的背景を持ちながら、フランシス・ウォルシンガムだけでなくバーリーとも関わり、またピューリタンのエセックス伯爵、ストレンジ卿、およびカトリックの親族や友人が多かったノーサンバランド伯爵などの援助を受けていた。

マーロウと第9代ノーサンバランド伯爵ヘンリー・パーシー（エセックスの妹の夫）との関係は、1976年にR. B. Wernhamが、ロバート・シドニーからバーリーにあてた手紙―その中に「マーロウがノーサンバランド伯爵とストレンジ卿の愛顧を受けている」という箇所がある―を出版したとき以来注目されるようになった。クリヤマはマーロウとパトロンとの関係について、トマス・ウォルシンガムおよびストレンジ卿との関係より、ノーサンバランドおよびウォルター・ローリーとの関係のほうがはるかに重要であると結論付けている。ノーサンバランドはマーロウと同年であった。彼は若いとき、上級貴族の若者の常で遊蕩に明け暮れていた。しかしながら彼は後に学問に非常な関心を寄せるようになり、賢者伯爵（ウィザードアール）と呼ばれるようになる。彼は自宅に哲学者や科学者を集め、年金を与えた。彼のもとに集まった詩人の中にはワトソン、マーロウ、ロイデン、ピール、チャップマンなどがいた。彼らの自由な討論はローリーやノーサンバランドを喜ばせたが、世間ではこの集まりのことを 'schoole of Atheisme'（無神論学派）と呼んだ。クリヤマはノーサンバランドとマーロウの繋がりについて卓抜な指摘をしている。ノーサンバランドの肖像画には天秤が書き込まれているが、その片方、短いほうのアームには、地球（あるいは世界）が乗せられ、長いほうには羽根が乗せられている。羽根の下にはラテン語の銘文 'Tanti'（'Worth so much' or 'Thus much I weight it'）が書き込まれている。これはマーロウの *Edward II* におけるギャヴェスタンの台詞[3]にあるのと同じ語である。

死の前年

クリヤマはマーロウが死の前年に引き起こした貨幣贋造事件について検証している。1592年はマーロウにとって運の悪い年であった。この年はペストが流行した。6月23日、枢密院はロンドンにおける劇場公演を、秋の聖ミカエル祭（ミケルマス）まで停止するとの布告を出している。これに先立つ1592年1月26日、サー・フィリップ・シドニーの死後、跡を継いでフラッシング（オランダのヴリシンゲン）の統治者となった兄弟のサー・ロバート・シドニーは、「学者Christopher Marlyと金細工師Gifford Gilbertを、英国およびオランダの通貨を偽造した罪で逮捕、本国送還した」との報告書を大蔵卿バーリーに送った。マーロウ逮捕は最初彼と組んでこの企てに荷担していたRichard Bainesの告発によるもので、彼はマーロウがこの金を持ってスペインおよびカトリシズムの側に寝返る計画であると主張した。貨幣贋造については当局の指示で行っていたという説もあるが、その場合は途中でベインズが裏切ること自体理屈に合わないなど、クリヤマは状況から判断してこれを否定している。クリヤマはマーロウとベインズについて、情報機関に属してはいるが、さして重要な役割を担っていたわけではなく、二人がフラッシングに滞在していたのは、日常業務（ルーティンワーク）を行うためであったと推測している。またクリヤマは、仮にベインズがケンブリッジ大学の記録に残っている「ベインズ」と同一人物であり、同大学の卒業生であるとすれば、二人はともに人文主義的教育を受けているので、自分たちの卓抜した能力に対して、正当な報酬を得ていないと感じただろうし、程度の差はあれ、反権威、

反権力の傾向を持っていただろうと推測している。こういう傾向を持った二人が、政府の統制が弱い辺境の入植地で、貨幣贋造という手段で鬱憤を晴らし、また常時金欠状態であった生活を少しでも楽にしようとしたことはあり得ることであった。

ではベインズはなぜ裏切ったかという点について、クリヤマは両者の経験の差によるものであると指摘している。ホッグレイン事件で短期間ロンドンの監獄に収監された経験を持つだけのマーロウに対し、ベインズはランスで投獄され、苛酷な拷問を受けた経験を持っていた。この経験の違いがベインズに、犯罪が発覚した結果に対する強い恐怖感を抱かせたと考えられる。またキリスト教に対する批判的態度についても、マーロウとベインズでは根本的に違っていたことが、ベインズのマーロウに対する悪感情を生み出したと考えられる。ベインズはランスの神学校で経験した、厳しく統制された苦行者の生活に代表される、カトリックの一側面に反感を覚えていただけであるが、マーロウのキリスト教に対する態度は「神と使徒に対する完全な軽蔑」であり、これはベインズのような人間には許容しがたい態度であった。

英国に送還されたマーロウは罰せられることはなかった。クリヤマは「金細工師の腕前を試していただけだ」という言訳が当局に通用したとも思えないと言いつつ、バーリーがかつてマーロウの MA 取得に尽力したときの経緯を指摘し、おそらく彼はマーロウの雇い主としてその人柄をよく知っており、また彼のことをまだまだ使える人間であると考えていたのではないかと推測している。しかしながらこの件でマーロウは、「カトリック側へ走ろうとした」という告発の内容から、身内にカトリック教徒が多く、従兄弟 Sir William Stanley による、カトリック信者を王位につけようとする陰謀に巻き込まれかけたこともあって、カトリックとの関わりを疑われることを極力避けようとしていたストレンジ卿の庇護を失うことになる。このためマーロウは、前にも増して、トマス・ウォルシンガムの庇護をもとめる結果になった。

マーロウは 1592 年 5 月 9 日に、些細な騒ぎを起こした廉で逮捕される。当時は往来で武器を振り回した程度でも、「街の安全を守るため」、頻繁に拘禁された。しかしクリヤマはマーロウが 4 ヶ月の間に 2 回逮捕されていることを指摘し、またこの時の保釈金 20 ポンドについても、金を出してくれるパトロンを失ったマーロウは、自分の財布から出さなければならなかったであろうと言っている。

死の年

マーロウの非業の最期については、たとえば Thomas Beard, William Vaughan といった初期の批評家には、「悪行の報いで神罰が下った」という類の解釈をするものがあったが、近年、より論理的な解釈が行われるようになった。クリヤマは「マーロウの死の年である 1593 年春にはペストが蔓延し、社会全体が沈鬱で緊迫したムードになっており、これがマーロウの死の背景になった」とする、C. F. タッカー・ブルックの説（1930）を支持している。

この時期の英国社会には、スペインの持続的脅威、北海沿岸の低地帯（ロウカントリーズ）での軍事作戦の長期化、インフレと高失業率が深く影を落としていた。無神論者—当時、何らかの点で非正統的立場を取っていた人々はこう呼ばれた—に対する排斥はあったが、むしろ外国人排斥やピューリタン排斥のほうがより激しかった。これはピューリタンの活動家が英国国教会の権威を弱めることが、結果としてカトリックにとって好都合となるからであった。外国人移住者排斥については、商工業に従事する英国人たちにとって、彼らの存在が脅威となっていたことが考えられる。

1593 年 5 月 5 日には、外国人居住者に対する過激な攻撃文書のひとつが、ブロードストリー

トのオランダ教会境内の塀に貼り出された（オランダ教会誹謗文書事件）。1971年にこの誹謗文書の現物が発見されたが、そこには「タンバレン」の署名があり、同じくマーロウ作の戯曲である『マルタ島のユダヤ人』（*The Jew of Malta*）や、『パリの大虐殺』（*The Massacre at Paris*）への仄めかしもあった。誹謗文書の作者はマーロウ賛美者の一人であると考えられるが、これは当時の社会状況のもとでは、劇作家に迷惑が及ぶ行為であった。

枢密院の指示で犯人探しが始まり、Thomas Kyd に嫌疑がかけられた。Charles Nicholl はこの理由について、キッドは一時マーロウと同室で劇作を行っていたし、マーロウ作品にも関わっていたと考えられており、またキッドの作品である『スペイン悲劇』（*The Spanish Tragedy*）の内容などから、反体制的であると見なされていたためであるとしている。『タンバレン大王』（*Tamburlaine the Great*）が出版された時、題名を記したページに作者マーロウの名が書かれていなかったという例を見てもわかるように、16世紀の芝居制作は現代の映画の場合と似ていて、内輪の関係者以外には誰が作者であるか知られることがないのが普通であった。キッドに嫌疑がかかった今一つの理由として、彼が父親の代からの公証人（スクリブナー）であったことが関係していると考えられる。ほとんどの人が何とか読み書きが出来る程度の教育しか受けていない時代にあっては、掲示映えのする見事な文字が書ける技術は少数者のものであった。キッドは自身の関与を否定したが、同時に誰の関与も知らないと言明した。しかし彼の持物の中から異端的内容の写本が見つかった。エリザベス朝においては、無神論と反政府的扇動は、神によって認可された国家権力に対する反逆であると見なされた。キッドは面倒を避けるためもあって、これをマーロウのものであると言った。これは事実であると見なしても良い。クリヤマはここで、この一連の事件はかつてウォルシンガムの部下であり、今はエセックス伯に仕えている人物が仕掛けた罠であるとするニコルの説を否定し、問題の文書は John Proctor の *Fall of the Late Arrian* の一部であり、この本自体はカンタベリにおけるマーロウの師であったジョン・グレショップも大っぴらに蔵書の中に加えていたことを指摘している。当局はケントのトマス・ウォルシンガム邸その他、マーロウの立ち寄りそうな場所を探して彼を召還した。クリヤマはマーロウが証人として形式的に喚問されたのであって、当局が彼自身に関心を示したのではないとするブルックの 説を支持している。

「オランダ教会誹謗文書事件」の背景には、枢密院のメンバーとなったエセックスとセシル父子の勢力争いがあったと考えられる。クリヤマは、現存するエセックスの手紙を調べていた F. S. Boas が、枢密院とバーリー父子に仕えていた諜報員 Cholmeley について、後日彼がエセックスのもとで働くようになった証拠を発見したことに言及している。セシルは F.ウォルシンガム死後、彼の作り上げたスパイ組織を受け継いでおり、マーロウも引き続きこの組織に関係していたと思われる。一方、エセックスがアンソニー・ ベイコンをブレーンに起用して情報収集を行っていたことはよく知られた事実である。クリヤマはエセックスが、たとえば1594年の Roderigo Lopez 医師逮捕に見られるように外国人排斥を行ったり、コルマリーをはじめとする、以前 F.ウォルシンガムの下にいた諜報員たちを使って無神論者の監視に力を入れたりしたことについて、「セシル父子やカンタベリ大主教ホイットギフトはカトリックや過激なピューリタンには神経を尖らせていたが、無神論者や異端者の動向はあまり気にしていなかった、そこでエセックスは彼らの関心の薄い分野を引き受けることで、女王に自分の力量を示そうとしたのである」という説については同意しながらも、ニコルの「エセックスはコルマリーを使ってマーロウを攻撃することでローリーを陥れようとした」という説には、ローリーは当

時すでに侍女との秘密結婚によってエリザベス女王の不興を買い、宮廷での影響力を失っており、エセックスも彼のことに関心はなかったとして反論している。さらにクリヤマは、コルマリーはエセックスの意を受け、劇作家として熱狂的な支持者を得ている上に、ローリーとのつながりを持ち、無神論者であるという評判が立っていたマーロウを利用して、バーリー父子を攻撃しようとしたのだと結論付けている。またクリヤマは「オランダ教会誹謗文書事件」を仕掛けたのはコルマリーであるとする点ではニコル説を支持しながらも、謀反を起こす直前にシェイクスピア作の『リチャード2世』(*The Tragedy of Richard the Second*) を上演させたというエセックスの有名なエピソードに言及し、エセックスは演劇の影響力をよく知っており、張紙の「タンバレン」への言及はマーロウ自身に対する攻撃ではなく、むしろマーロウの作品によって引き起こされる市民感情を利用して政情不安を引き起こそうとする意図があったと推論している。

死の真相

謀殺説が依然として根強いマーロウ殺害の原因については、クリヤマは勘定書きをめぐるトラブルが原因であるという単純な説を支持している。クリヤマはマーロウが Ingram Frizer に誘われてデットフォードのエリナー・ブルの家に行った理由について、当時のデットフォードはテムズ川沿いの小さな港町であり、「オランダ教会誹謗文書事件」の証人として、枢密院の召喚に応じるため、ペストの脅威にもかかわらずロンドンを離れることができなかったマーロウにとって、郊外で1日の息抜きをするには最適の場所であったと推測している。未亡人エリナー・ブルについては、彼女はおそらく仕出し屋と提携して、私的なパーティの会場を提供するのを生業としており、バーリーの遠い縁者であるとはいえ、バーリーがマーロウの死に何らかの関与をしていると考えるには遠すぎる縁であるとしている。マーロウの懐具合については、当時劇場はペストのため閉鎖されており、上述の理由から諜報活動にも従事できず、収入の道は閉ざされていた。またロンドンに足止めされている間の生活費も必要であったため、平生よりも金が不足していたと考えられる。従って彼が招待客としてすべて支払って貰えると期待していたにもかかわらず、支払うよう求められた数シリングは、その時の彼にとって決して「僅かな」金額ではなかったと考えられる。またクリヤマはフライザーをはじめとするそこに集まった人々は、法律の知識を持って世渡りをする人々であって、武力を用いることは得意ではなく、むしろ4名の中ではマーロウが一番粗暴であったと指摘している。さらにマーロウ殺害時、同家には他にも多くの客が居合わせており、目撃証言をしているという状況を考えると、仮に劇作家一人殺害する積りなら、職業的殺人者にとって、当時のロンドンには暗い路地や人気のない街道等、いくらでも適当な場所があったはずであるので、そんな人目につきやすい場所を選ぶはずがない。また即死には至らない眼窩を狙うというのもプロの手口とは言えず、通常は心臓や喉を狙うものであるという、非常に説得力のある推論をしている。

死後

マーロウはエリナー・ブルの家から程近い聖ニコラス教会に運ばれ埋葬された。クリヤマは David Cressy や A. D. Wraight の研究を踏まえ、過去にマーロウが埋葬された場所が、現在建っている聖ニコラス教会境内のどの位置であると推定されるのかを述べ、また行き倒れをも手厚く埋葬した当時の習慣から推して、マーロウも埋葬の時にはしかるべき儀式を行なって貰えた

だろう、少なくとも経帷子位は着せて貰っただろうと考えている。

マーロウの戯曲やゴシップは死後40乃至50年程度で人々の記憶から消えてしまった。クリヤマによれば、これはシェイクスピアやベン・ジョンソンと比較すると解るように、作品数の少なさから作品集出版という運びに至らなかったためでもある。1744年になってDodsleyの*Old Plays*が出版されたことが、マーロウ作品が再び世に出る転機になった。Edmond Maloneはケンブリッジ大学の記録を調べ、彼がコーパス・クリスティ学寮出身であること、およびおおよその生年を突き止めた。その後の研究により、今ではカンタベリの聖ジョージ教会に残っていた記録から、彼が1564年5月21日に洗礼を受けたことが明らかになっている。

まとめ

クリヤマが検証しているように、マーロウの短い生涯における疑問点のうち、最大のものは2つある。第1はケンブリッジ時代、諜報活動のため英国を離れ、大陸のランスその他に行っていたか否かという点である。クリヤマの研究を妥当であるとしながらも、マーロウの生涯に付きまとう行動の謎には、完全に拭ぐいきれない疑問が残る。第2の疑問点は、長らく論じられてきたデットフォードにおける死の真相である。これについてはクリヤマに先行する研究者であるユーリーが、「マーロウは自らの激しい気性の犠牲者である(4)」と論じているのも踏まえ、クリヤマの説を妥当であるとするのが賢明だろう。

マーロウが生活した環境が作品に多大な影響を及ぼした点については、研究者たちの意見が一致するところである。『フォースタス博士の悲劇』（*The Tragical History of Doctor Faustus*）の舞台となっている学都ウィッテンベルクは、実際はケンブリッジがモデルであり、『マルタ島のユダヤ人』に描かれている島内の社会は、金融や商業の中心地となりつつあったエリザベス朝ロンドンの縮図である。しかしながらローマ時代に端を発する城壁の内外に、英国国教会の総本山と、英国におけるキリスト教上陸地点でもある、ヘンリー8世時代に破壊された、聖アウグスティヌス修道院の廃墟を擁し、カトリックの殉教者2人を抱える、生地カンタベリの都市としての特殊性については、早くからA. D. ライトが指摘しているように、マーロウ作品の構造（特に2極構造）自体に影響を与えていると見られている。W. ユーリーは、著書*Christopher Marlowe and Canterbury*において、「1574年11月、イングランド南東部の夜空に、この地方の緯度では珍しく壮麗なオーロラが現れた」という記録を発見したことに言及している(5)。『フォースタス博士の悲劇』では、世界は神と悪魔の領域が複雑に交錯するクローズドシステムから成り立っている。ユーリーが推測するように、仮にマーロウが小規模ではあるがカンタベリにおいても時折見られるオーロラを目撃していたとすれば、第5幕において悪魔に連れ去られる間際のフォースタスが、夜の天空に救済を象徴するキリストの血潮が流れる幻影を見るシーンに影響を与えたと考えることができる。

注

(1)　クリヤマによると、マーロウの時代には各学寮（カレッジ）の提供する講義や個人チューターが、ケンブリッジ大学（ユニヴァーシティ）のパブリック・レクチャーより大きな位置を占めるようになり、また書物や印刷物も入手しやすくなったので、‘attendance requirements’の実質的な意義は薄れていたと考えられる。1570年代の記録では、カレッジでの生活は朝5時前に起床し、お祈りの後、哲学とギリシア語の勉強が延々と続き、残りの時間は大学での講義や討論に当てられていた。このように厳しい規則は一には修道院的

な伝統によるものである。学生は自室において反宗教的な本を読むことを禁じられた。また服装の色や形についてのドレスコードもあった。学生のレクリエーションとしてはフットボールやケム川沿いの草地の散策があり、節度を弁えた上でならカードゲームを楽しむことも許されていた。またクリスマス休暇中には芝居が頻繁に上演されたことがわかっている。芝居はラテン語による古典劇が好まれたが、英語による作品も上演された。ラテン語劇の中には、大学の構成員によって書かれたものもある。芝居の上演の際には騒動が付物だった。上演はカレッジの狭いホールで行われたので、入れなかった者がガラス窓を割ったりすることもあったらしい。

マーロウが在学していた頃、英国内の宗教対立を反映して、オックス・ブリッジにおいても熾烈な対立が見られた。両大学ではピューリタンが主流であったが、当局の弾圧にもかかわらず、隠れカトリックが存在していた。ケンブリッジはオックスフォードと比較すると非国教徒に対して寛容だったらしい。マーロウがケンブリッジで知り合った人々の内、数名の過激なピューリタンがマーロウの死の少し前に処刑された。マーロウはトマス・ナッシュとも知り合うが、ナッシュはむしろロバート・グリーンの方に親しみを感じたらしい。またクリヤマはほとんど信じてはいないようだが、仮に *Dido* をナッシュと共作したとすれば、この時期だとしている。

(2) William Urry, *Christopher Marlowe and Canterbury* (London: faber & faber,1988) , p.57.

(3) Christopher Marlowe, *Edward the Second* ed. Charles R. Forker (Manchester: Manchester Univ. Press., 1994) , 1 幕 1 場冒頭のギャヴェスタンの台詞参照—

As for the multitude, that are but sparks
Raked up in embers of their poverty,
Tanti! I'll fan first on the wind
That glanceth at my lips and flieth away.
(I.i.20-23)

(4) William Urry, *Christopher Marlowe and Canterbury* (London: faber & faber,1988) , p.98.

(5) *ibid.*, P. 4.